
和麻のキモチは？

ゲキガンガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

和麻のキモチは？

【Nコード】

N5256P

【作者名】

ゲキガンガー

【あらすじ】

風の聖痕の二次創作です。長編です。

それだけです。今更ですが、亡くなった山門先生、未完のまま終わった風の聖痕に捧げるファンアートです。

ファンの方で感想などありましたらお気軽にお願いします。

和麻のキモチは？（前書き）

未完のまま終わった風の聖痕を惜しんで書くつもりで長編です。

和麻のキモチは？

『和麻のキモチは？』作ゲキガンガー。

「つつ
」

和麻は頭を抑えながら身を起こした。起きた場所は、いつものマンション（とはいえ、敵に狙われにくくする為に転々としているのだが）の一室ではなく、神風家の一室だ。

先日行われた地術師と水術師との戦闘の後、神風の長である巖馬のすすめで神風邸に寝泊まりをしていた。静養しろという事かもしれないし、綾乃を守って欲しいという意味もあったのかもしれない。かつてはあれほど忌み嫌ってきた神風邸であったが、今では熟睡とまではいえないが、眠れるくらいにはなっている。とはいえ、いつ寝込みを襲われてもいいように、意識の半分くらいは既に起こし続けているのだが、風の精霊達を四六時中、寝ている時も関係なく侍らせ、そこに踏み込むものがいれば、即座に反応できる位の事はできる。いわば高性能のリーダーを常時備えているようなものだった。（まだ酒が残ってるな）

頭を抑えつつ、和麻は胸中でそう言った。昨晚の事ではあったが、和麻は巖馬の勧めで酒を飲んだのだが、その時の酒がまだ残っているようだった。調子に乗って飲みすぎたか。普段から、どんな時があっても隙を作らない事を心掛けてきた和麻だが、それでも時にはハメを外す時もあった。緩んでいたのであろ。いや、緩んできたのかもしれない。かつて程冷酷ではいられなくなってきた自分がある。それは弱くなったとも言えるのかもしれない。その事を苦笑しつつ、起き上がろうとする。

ふにょん。

という感覚が手のひらに走った。

「くーかー、くーかー」

規則正しく間抜けな（よく考えれば気づかない自分もそうであるが）吐息が聞こえてくる。

横で寝ていたのは小雷だった。かつては晒しを巻いて男として振る舞っていたであろう胸は、現在何も巻かれていない。何もだ。つまりは、服の下には何も身に着けていないようだった。感触でわかる現状を整理しよう。恐らくはこいつは夜這いに来たわけだ。和麻の風の精霊、そのレーダーを潜り抜けるには、風の精霊に働きかけ、その活動を停止、あるいは完全に同調する必要があるわけである。それができるのは、風術師である小雷だけだ。和麻は頭を抱える。つまりはこいつは夜這いに来たはいいが、何をしたらいいのかが全く分からず、自分の隣で寝こけてしまった、

夜這いとはどういう事をするのか、そのかんじ要のところがわかっていないようだった。あまりにも子供でありすぎる為に。つまりはそういう事だった。寝間着の浴衣のような薄着の胸元がはだけ、惜しげもなく晒しているのだが、そんな事は和麻にとっては興味範囲外だった。

『俺の男になれ！』という、小雷の言葉が思い出される。どうやら本人は至って真面目だった様子だ。残された鳳家の為、両親の復讐の為、それを果たす為、どうやら身を砕いている様子だった。14歳の少女には重すぎる責務だろうが、彼女は彼女なりに立派に果たそうとしている。

和麻は「やれやれ」と首を振りながらため息を吐く。

「和麻　和麻　！」

声が聞こえてくる。廊下の方から。言うまでもなく綾乃の声だった。「お父様が朝食の準備ができたから呼んで来いって　って……」勢いよく障子を開け放った綾乃だったが、瞬時に表情を凍らせる。綾乃にとっては、刺激の強すぎる光景だったのかもしれない。

綾乃は言葉を発せる事もできず、小雷は寝こけ、結局和麻しか言葉を発する事はできなかった。

「よ」

と、だけ。気輕過ぎ、緊張感の欠片もない挨拶だった。

「か、か、和麻の」

ぴくぴくと表情をひきつらせながら、

「馬鹿！」

綾乃の怒声は、屋敷中に響き渡った。

和麻のキモチは？（前書き）

お待たせしました。続きです。

とりあえず書き上げたいです。

和麻のキモチは？

（和麻の馬鹿　！　変態！　ロリコン！）

胸中で怒声をあげる綾乃。場所は学校の教室だった。机に肘をかけ、悶々とし続ける。

（だいたいなによ。でれでれしちゃって）

勿論、小雷が和麻自体を好きだとか、そういう想いがあるからではないというのはわかつている。別の魂胆がある事は十二分に理解しているつもりだ。

だが、小雷のアプローチは、綾乃にとって目に余るものだった。思えば、直接的なアプローチの少なかった、いや、皆無だったといつてもいい綾乃に対して、小雷は直球といつてもいい、ストレートなアプローチをしてくる。それに対して、遅れをとったような、複雑な感情を抱いてしまう。

（それじゃまるであたしがあいつの事を好きみたいじゃない）

綾乃は頭を振った。傍目から見れば、少々おかしいかもしれないが、端的に言えば、『妬いている』のだが、綾乃は決して首を縦には振らないであろう。

「どうしたの？　綾乃ちゃん、いつにもましてツンツンとしちゃって」

親友　表面上はかもしれないが　の一人である篠宮由香里は、そう言った。

「そうだな。まるで想い人を奪われ、嫉妬で狂っているかのようだと、もう一人の親友である久遠七瀬も、そう相槌を打つ。あまりに端的な例えは、実能的をえていた。

「誰がよ！　誰が！　あたしはいつにもまして、ただ冷静なだけよ」

綾乃は、怒声を振り回しながら、否定をする。

「自覚症状がないって怖いわね」

と、由香里はため息をついた。

「全くだ」

七瀬も相槌を打つ。

「どうせ和麻さんの事でしょ？」

と、由香里。

「そんな事ないわよ。あるわけないじゃない、はははっ……」

綾乃は、まるで、『ぎくっ』という擬音が聞こえてきそうなほど、苦々しく苦笑を浮かべた。

「その顔は凶星だな」

と、七瀬。

「そうね。それも、ただ事じゃないわ。恐らくこの顔は『綾乃ちゃんに新たな恋敵出現、しかも相手は年下ね。そして、綾乃ちゃんは後塵を拝す事になる。悔しい綾乃ちゃん、でもどうしたらこの遅れを取り戻すかわからない。ああ、どうしたらいいの』って、顔だけ表情だけでそこまで端的に読み取れる由香里が空恐ろしい綾乃だった。

「違うわよ　だから」

「はいはい。そういう事にしといてあげるわよ。それはそうとして綾乃ちゃん。このままじゃられないわ。年上には年上の魅力というものがあるはずよ。それを存分に活かせば、この遅れを取り戻す事も不可能じゃない！　ここが天下の分け目の大合戦！　恋のターニングポイントなのよ！」

聞いちゃいない由香里だった。こうなったら、手には負えない。炎術で消し炭にでもない限り。

「というわけで、『綾乃ちゃんと和麻さんのラブラブ大作戦スタート！』」

由香里は、そう宣言し、作戦を実行に移した。当の本人達の意味など完全に無視して。

柊太郎。

少年の名はそういう。密かに　ではない、明確な意思表明を持つ

て、綾乃に好意を寄せている少年である。

入学してから、綾乃に一目惚れに告白。撃沈。一步間違えれば、ストーリー扱いされかねないが、それから、綾乃に対するアプローチを行い続けている。全て空転しているというのは、言わないであげて欲しい。本人が悲しくなる。決して叶わない恋なのかもしれない。だが、太一郎はそれでもよかったのだ。好きな相手を想い続ける、それだけでも至福のひと時を味わえる。それは多分に自己満足的なのかもしれないが。

それに、普段から嫌悪している風術師、八神和麻に対する敵愾心というものも、確かに存在するのだろう。

憧れの先輩である綾乃を、いくら強いとはいえ、下衆野郎に渡したくはない。正義感の強い彼には、決して許せない事でもあった。

そんな彼が、町中を出歩いている時の事だった。

裏道の方で、下品な奇声があがってくる。「なんだコラ!」「てめえやるつてのかコラ!」というような、ボキャブラリーの数を、呪いか何かで制限されているのではないかという程、お決まりな台詞を喚き散らしている。

太一郎はなぜかこういった場面に遭遇する事が多かった。そして、そういった場面に遭遇した場合、見て見ぬふりをする事ができる人間ではなかった。もはや、体が動いていた。

「やめろ!」

そう、叫ぶ。

「あ?」

80年代の族のような、親切心からか、とてもわかりやすい恰好をしたチンピラ達。数は4、5人といったところは一斉に太一郎の方を向いた。

その被害にあっていると思しき被害者は、一人の少年だった。いや、少年ともとれるし、少女とも取れる。しかし、煉の時の失敗もあるので、ここは少年という事で、太一郎の中では決定しておいた。中国の服装に、袋に包まれている長い棒。それは彼（便宜上そうして

おく)の身長を遥かに超えていた。

明らかに、窮地に達していた。少なからず、太一郎はそう判断をした。強者が弱者を踏みにじろうとしている。その状況を看過できる程、彼の正義感は落ちぶれてはいなかった。

「あ？　なんだテメーは、やんのかコラ？」

チンピラ集団の一人は、そう言ってきた。

「その子に何かあったら僕が許さない」

太一郎は、多少武術の心得があった。だが、数が数だ。一対一なら優位に立てるものでも、多対一だったら、その優位性は消えてなくなる。いつもこうだった場合に遭遇し、逆にボコボコにされるというのは良くある事であった。彼の武術は、決して無敵でもなければ、圧倒的ではない。綾乃の炎術、和麻の風術を目の当たりにしてきた彼としては、何度も己の無力さを思い知ってきた。だからといって、今ここで闘うわけにもいかない。

チンピラ達は、標的を、少年(仮)から、太一郎に変えた。じりじりと間合いをつめる。手には獲物、鉄バットやらパイプやら。原始的な武器だが、徒手空拳では敵うはずもなし。

「やっちまうぞコラ！」

「ぴーぴーいわすぞコラ！」

原住民の言葉は、多分に理解がし辛かったが、ようは怒っているのは確かだった。

チンピラ達の怒気が頂点に達し、ついに闘いが始まろうとしたその時だった。

突如風が薙いだ。

突如の烈風。それらは、鎌鼬となって、チンピラ達を襲う。高々、ナイフ程度のキレ味だったが、それでもチンピラ達の戦意を失せさせるには十二分の高価があった。

見えない力による暴力に、チンピラ達はあっという間に屈服した。無様な醜態をさらしつつ、チンピラ達は逃げていった。

後に残ったのは、太一郎と、その少年だけだ。一瞬、和麻が助けに

きてくれたのかと思った太一郎だが、そんな事はないし、冷静になればそういう事をする人間ではないという事を、太一郎は十分に思い知っていた。あいつは、自分の利益にならなければ何かをするような事をない。困っている人を平気で見放せるような人間だ。いや、踏みにじりもするのかもしれないが。

「あの程度の相手、虚空閃を使うまでもない」

少年はいった。「しかし、貴様、礼はいつておこつ。助けに入った、その気概は評価する」

淡々といったのけた。少年にとっては、さつき程度の相手は物の数にも入らなかったのだ。

「その力 八神と」

先ほどの風、直観的に理解したが、和麻が使う風術と同じものだろう、は目の前の少年がやった事なのだ。驚く太一郎だったが、初見ではないので、そこまでではあった。驚きはしたが、目の前の少年が使えるという事に驚いたのであって、風術自体に驚いたのではない。

「貴様、和麻を知っているのか？」

少年は、かなり驚いた様子だ。それもそうだ。ただの一般市民ではないように見える（実際そうなんだが）太一郎が、最強の風術師である和麻の事を知っているという事は、驚いて然るべきであろう。「ああ。まあ、一応、知り合いつてことになる、かな。君こそ、八神の知り合い？」

という事は、綾乃とも知り合いという事になるのかもしれないが。

「俺は、和麻の妻だ」

「は？」

臆せず言つてのけた少年 どこか誇らしげですらある、少年に対して、太一郎は呆けたような声をあげる。『和麻』という部分にではない『妻』という部分にである。この少年が、和麻と結婚し、妻となる上では、奴の性格とか、年齢は元より、もっと高いハードルがあるのではないか。つまりは、性別の問題が。

もしかしたら、中国ではもはや同性での結婚ができるのかもしれない。見たところ中国人みたいであるし。いや、もはやそういう問題ですらないのかもしれない。お互いがお互いを愛し合っていれば、お互いの性別など関係ない。社会制度や、他人の目など気にする事もなく、愛こそが真実である。

そういう考えに至っているのかもしれない。

「貴様、何を驚く事がある？　俺が和麻相手に相応しくないとでも思うのか？」

本気で疑念しているのだろう。少し、表情に不安の色が浮かんでくる。

「いや……そういうわけじゃないんだけど、君、男の子だね？」

「違う。俺は女だ！」

少年　いや、少女は、そう声を張り上げた。

「え？」

「なんだその信じられない、とても言いたそうな表情は」

恐らくは、煉とは反対のパターンなのだろう。男の子、みたいな女の子。考えてみれば、何も不思議はない。煉のような女の子にしか見えない男の子もいれば、その逆もまたある。

「えーっと、じゃあ、君の名前は？」

「小雷」

「えーっと。小雷ちゃん」

「ちゃん付けするな。虫唾が走る」

「じゃあ、小雷。君はどうしてこんなところに？」

「俺は、この近くにある『デパート』やらに、和麻を籠絡すべく、女モノの服を買いにきた。しかし、途中で俺は気づいたのだ。こちらの国では、香港の通貨である香港ドルが使えない。それに、備蓄もつきかけていたのだ。そういうわけで、手ごろな小悪党を見つけ出し、成敗、そして、少々拝借しようと思っていたのだ」

小雷の説明は、いわば、太一郎の認識が逆だったという事を物語っていたようだ、小雷が襲われていたのではなく、小雷が襲っていた

のだ。

思わず、落胆せざるをえない太一郎。

「……どうした？」

「いや。何でもなし。八神と知り合いつて事は、神風 綾乃さんとも知り合いなのか？」

「そうだ。今俺は、神風家に居座っている」

おおよその小雷の關係は理解した太一郎だった。和麻は、風術師ではあるが、元々は炎術師の家系の生まれであり、綾乃とも遠い親戚である。という事は、もしかしたらこの少年は、和麻が風術師として修業で中国に渡った時の知り合いなのかもしれない。

その程度のあたりはつけておいた。

そんな事はどうでもよく、太一郎にとって重要なのは、一点でしかなかったのだが。

「和麻の嫁つてどういう事？」

「言葉通りの意味だ。和麻は、俺の男であり、俺は和麻の嫁でもある」

「それに対して、神風先輩 いや、綾乃さんはどう思っているんだ？」

「炎雷霸を振り回し、口から火を噴き、あの女は何とも見苦しく、嫉妬に狂っているな。俺と、和麻が仲むつかしくしているのがそんなに気にいらぬのか」

「 本当か？」

太一郎の中で、浅ましい作戦が思いつく。いや、思いついてしまう。このままこの子 小雷と、和麻をくつつける。当然、認めたくないが、和麻に執心している綾乃は、一人になつてしまう。そこに颯爽と（付け入るともいう）現れる太一郎。失恋中（認めたくはないが）の乙女というものは、その傷を癒してくれる相手というものを探しているものだ。そんな時、傍にいてくれる人（太一郎のことだが）が、いれば、コロリといってしまう。

全ては計算上の事だが、上手くいった暁には。

憧れの神風先輩と。思わず、「ぐへへっ」と、不気味な笑みと共に、よだれを垂らしそうになる太一郎。

「なんだ。気持ち悪い奴だな」

と、小雷。

しかし、そんな浅ましい作戦を実行してもいいものか。男らしさに欠ける作戦だ。しかし、何もなくては、綾乃との距離が縮まる事はない。このままでは、二人の関係は進展する事がない。

天使と悪魔が闘った結果、勝ったのは悪魔だった。

「小雷」

と、突然、手を握る太一郎。そして、熱烈な勢いでエールを送る。

「僕君に協力するよ。是非、あいつと上手くいってくれ。僕に出来る事なら、何でもするよ」

「ああ。そうか」

こうして、小雷と太一郎。二人の共同戦線が誕生したのであった。

和麻のキモチは?? (前書き)

指摘された部分修正しました。

変更した部分から乗っけておきます。

長編ではなく、ただのラブコメチックな中編になりました。

あまりオリジナル要素出たくないので致し方ありません。

和麻のキモチは？

しかし、そんな浅ましい作戦を実行してもいいものか。男らしさに欠ける作戦だ。しかし、何もなくては、綾乃との距離が縮まる事はない。このままでは、二人の関係は進展する事がない。

正義感の強い太一郎故に、天使と悪魔の囁きあいには、強く揺れるのであった。

「甘い！ 甘いわよ柊君！」

突如、張り上げるような声が響きわたる。

「篠宮さん……」

声の主は、当然のように由香里だった。突如の事だったので、小雷も「誰だ？」と小首をかしげていた。

「愛を成就する為には、多くの困難が存在するわ。その困難を乗り越える為に知略を尽くしてなにが悪い？ いや、悪いわけがない（反語）。君主論で、かのマキャベリが言ったように、目的の為なら手段を選ぶべきじゃないのよ！」

そして、一方的に捲し立てる由香里。

「ねえ、柊君、和麻さんに綾乃ちゃんを取られちゃってもいいの？」

太一郎の手をとりつつ、迫る由香里。

「それはそうですけど、でも」

小雷を横目で見る。こんな幼気な少女（本人いわく）を、あの悪魔みたいな男に差し出していいのだろうか。

「大丈夫。この子は、風術師としての、優秀な血筋が欲しいだけなんだから。つまりは、和麻さんは種馬みたいなものね。事が済めば万事OKみたいなノリなのよ」

と、由香里。

尚更不謹慎だと思うが。それにしても、由香里のネットワークは学内だけではなく、風術師業界にまで及んでいるのか。未恐ろしい。いや、既に恐ろしいが。

「あなたの手で、綾乃ちゃんを目を覚ましてあげて。あなたならできる。いえ、柊君、あなたにしかできない事なのよ！」

「……僕にしか」

「綾乃ちゃんが、柊君を待っているわ」

その一言に柊は撃たれた。上手くいった暁には、ついには憧れの先輩と。夜な夜な、想像していたような 思春期の少年なら致し方ない ような事を。デート、甘いキス、そして、大人な夜。果てには、幸せな家庭を築いていく、そんな妄想まで浮かんでくる。

「うおおおお！ 僕はやります。どんなことでも！」

「その意気よ！ 柊君」

由香里の笑みの奥底に、悪魔じみたものがある事に、太一郎は気づいていなかった。

一人、置いてけぼりになっているような小雷だった。

舞台をデパートに移す。今いるのは、婦人服売り場だ。

「……それで、小雷ちゃんは、服とか持っていないの？」

そう聞いたのは、由香里だった。

「神風綾乃が買ってくれたが、全部捨てた。ついでにお古もだ」

「え？」

奇声をあげる太一郎。

「敵に温情をかけて貰うわけにはいかない」

敵、というのは恋敵の事を指すのかもしれない。神風先輩の着用していた衣服を捨てた。

いってくれば、いくらでも出して買ったのに。

そう、思ってしまった太一郎。浅ましさのあまり、自責の念にとらわれる。

「とりあえずは、下着を買って。その次は、色々と似合いそうな服を着てみましょう」

そういうわけで、太一郎、及び由香里は更衣室の一室の前で待

っている。由香里はいつものように笑顔で。しかし、太一郎は婦人服のコーナーという事で、若干の居づらさみたいなのがあった。他に女性客の視線というのも、若干は気にもなる。

「これでいいのか？」

声と共に、更衣室のカーテンを開ける小雷。

小雷が身に着けていたのは、チャイナドレスだった。

「これよこれ。中国人といったら定番はこのチャイナドレス！これで和麻さんのハートもぐーっと驚掴みよ！」

親指を突き立て、興奮する由香里。

「そうか？」

なぜ、デパートにチャイナドレスなどあるのかはさておき（どんなデパートやねん）

それにしても、小雷は、ダイヤの原石のようだった。ボーイッシュに見えた服装も、女の子らしい服装になれば、それだけで輝く。少し磨いたただけでだ。

（なぜ……なぜ、あんな男ばかりが）

思わず、和麻の事を恨めしく思ってしまう太一郎であった。

それから、ファッションショーは続いたが、ひとつだけ言えたのは、小雷が美少女とっていい素養がある事だった。男っぽい服装、言動がそれらを台無しにしているというだけで。

「それじゃ、柊君お会計」

一通り見繕ってから、似合いそうなものを数点レジに持っていく。そして、金額が叩きだされた。

ギリギリ、六ケタに届かない程。

「……先輩、僕が出すんですか？」

「愛に犠牲、いや、投資は必要不可欠なの。わかって、柊君」手を握り、瞳を潤ませて由香里。

泣く泣く（リアルに涙を流しつつ）財布を紐解く、太一郎だった。

「それでは、次は、言葉遣いね。小雷ちゃん、自分の事『俺』って

呼んでいるでしょ？」

と、指を立てつつ由香里。場所は公園に移っていた。

「ああ。だが、その何が悪い？」

「そういった、男勝りな女の子に萌える、そういう男子は多いわけど、和麻さんはそういうタイプじゃないの。ここはギャップ萌えで攻めるべきよ！」

『ギャップ萌え？』

声をそろえる、小雷と太一郎。

「そう！ 普段、男勝りな小雷ちゃんが、突如しおらしく、淑女の振る舞いをする。そのギャップに、思わず和麻さんもときめいてしまうという寸法よ！」

本当に、そんなにうまくいくのか？ という、疑問を呈する人間はその場にはいなかった。

「これから、わたしが、言葉遣い、それから立ち振る舞いの手ほどきをするわ！ いいわね、小雷ちゃん！ この通りにするのよ。それから、これから私の事は、サーと呼ぶ事。わかったら『イエッサー』よ」

こうして、由香里の徹底した指導が始まる事になった。

その頃、弟の蓮と町中を歩いていた和麻は、くしゃみをした。

「どうしたんですか兄様、風邪ですか？」

横にいる、煉が心配そうに、そう聞いてきた。風術師が風邪をひく。なるほど、洒落が聞いているかもしれない。

「いや、なんだか風の精霊が、妙な気配を感じ取っている。なぜか悪寒がする。風の報せてやつた」

「良くない事が起こるんですか？」

「ああ。多分、間違いなくな」

どんな敵が現れるかわからないが、とにかく和麻は用心の心構えだけはしておいた。

翌日の学校。その玄関の下駄箱だった。

綾乃にとって、ラブレターを貰うなどという事は、日常茶飯事だった。

ただ、果たし状を貰うという事は、あまり記憶にない。

『差出人、鳳小雷。神風綾乃。』

どちらが八神和麻の妻に相応しいか、尋常に勝負せよ。この小雷、鳳家の名にかけて、生成堂々と相手をする。』

なぜ、神風の家に同居しているのにこんなまどろっこしい真似をするのか、綾乃には測り兼ねたが。

重要なのは、この果たし状の文面だ。

どちらが八神和麻の妻に相応しいか。

そもそも、妻に立候補するつもりなど毛頭ない、と言い張る綾乃にとっては、全く持って不愉快な一文だった。

だが、この湧き出てくる闘志のようなものはなんだろうか。怒りに呼応するように、炎の精霊は揺らぎ、思わず周囲のものを燃やし尽くしてしまうそうだった。

「大変じゃない綾乃ちゃん！ 小雷ちゃんと、和麻さんの妻の座をかけて、勝負をするんですって？」

教室に入った時。由香里の第一声がそれだった。

「由香里……あんたどうしてその事を」

まず間違いなく、これは由香里の差し金だろう。先日いつていた、ラブラブ作戦だの、なんだのの一環だ。本人は良かれと思っているのだから手に負えない。単に面白半分という事もあるが。

「そんな事より綾乃ちゃん、このまま和麻さんを小雷ちゃんにとられちゃってもいいの？」

「あのね。由香里。あたしとあいつはそんな関係じゃ、全然、全く、こればつちもないの」

綾乃は強く否定する。

「さっきから何だか霧消に暑いんだが、これは気のせいかな？」

そう、手で扇いでいるのは七瀬だった。綾乃の炎の精霊の力により、部屋の温度が十度は軽くあがってしまっている。抑えきれなかった、精霊達の揺らぎが、室温を大幅にあげてしまったのだ。揺らぎは綾乃の感情の揺れに起因する。

「いいの？ 綾乃ちゃん、もし和麻さんが、小雷ちゃんにとられちゃう事があつたら、そのまま和麻さんは鳳家に婿入り。もう二度と帰ってこないって事も」

結局、綾乃は由香里の口車に乗せられる事になる。

和麻のキモチは？ 【完結】（前書き）

完結しました。

詳細はあとがきで書こうと思います。とりあえず読んでくれた方ありがとうございました。

和麻のキモチは？【完結】

「宗主の呼び出しか」

風来坊の和麻といえど、宗主に対する扱いだけは別格だった。その呼び出しを反故するわけにもいかない。とりあえずは、神風家の本家に、足を踏み入れる事になる。門をくぐると、そこはパレルワールドみたいだった。庭には、まるでクリスマスパーティーのように、色とりどりの飾りつけがしてある。

「は？」

常に最悪の事態に備えて行動している和麻でも、この展開だけは想像だになかった。

まず、聞こえてきたのはクラッカーの音。次に、大きなくすだまが割れる音。そして、大きな垂れ幕に一文字。

『八神和麻、花嫁争奪戦』

と。

正直、理解に苦しんだ。戦闘の時でも、ここまで苦悩した事はなかっただろう。

『さあ！ ついに主賓の八神和麻さんが来場しました！ 実況はこのわたくし、篠宮由香里がお伝えします！』

『解説の久遠七瀬です』

対照的な、二人の挨拶。これからプロレスか何かの実況でもするつもりなのか。

『ここで、ゲストの皆さんをお伝えしましょう！ まず、神風家宗

主、神風重悟さん！』

『うむ』

うむじゃねー、と、正直和麻は突っ込みたかった。

『続きましてのゲスト！ 和麻さんの実の父親にして、蒼炎の使い手とされる炎術師、神風巖馬さん！』

『ふん。あのような馬鹿息子が結婚など、十年は早い』

と、偉そうに敵馬。

「そして三人目。和麻さんの実の弟にして、美少年、思わず頼ずりしてしまいたくなります。神風煉君！」

『あはは……その、兄様。頑張ってください』

力なく、エールを送る煉。

「さらにさらにスペシャルゲスト！ 綾乃ちゃんに想いを寄せる熱血男児、柊小太郎君」

『……』

心情的に、綾乃を応援できないであろう太一郎は、黙り込んだ。

「以上のゲストをお迎えして、本日の試合を開催します」

プロレスやボクシングでもあるまいに。

「ルールのご説明をしましょう！ 競技は三種目。その三種のうち、二個を制したものの勝ちと致します。解説の久遠さん、この試合をどう見ます？」

「どちらも、花嫁には程遠そうだ。包丁より矛が似合う」

「実能的確な解説でした。尚、勝者には、八神和麻さんの花嫁としての正当な権利が授けられます」

『うむ』

由香里の実況に対して、重悟は頷いた。

「おい！ どういう事だ宗主！ 一体これはどういう茶番だ？」

和麻は叫んだ。自分の意思というものが完全に無視されている。それに、あの厳格な重悟が、いくら口が上手い（+色々なスキルがあるが）由香里の口車に乗せられたからといって、この様な事を認めるとは思えなかった。

「なに、中々自分の心も理解できない娘にとって、良い機会かもしれないと思ってな。そういった意味で、あの鳳家の娘の方がまだ大人だ」

重悟はいった。娘の幸せを願う父という側面もあるだろうが、なんにせよ、神風家の正当な嫡子であり、また風術を極め、風の精霊王と契約し、コントラクターとなった和麻。婿相手として、これ程好

ましい相手はいないだろう。どこぞの馬の骨、とまではいないが、凡骨な相手にくれてやるよりは、和麻の方がいい、という打算的な感情もあるのかもしれない。何より、綾乃との婚姻を機会に、過去に見切りをつけ、和麻と神風家の因縁を決着し、復縁したいという気持ちもあるのだろう。

なにせよ、和麻にとっては余計なお世話以外の何物でもなかった。「それでは、青コーナー、鳳小雷選手の入場です。風の神器虚空閃の使い手にして、鳳家の正当な生き残り、ここで勝って、和麻さんと共に一族の復興を成し遂げる事ができるのか！ ああ、二人の運命はいかに！」

流石にバックミュージックは流れてこなかったが、小雷が登場してきた。以前のような、男勝りの恰好ではない。今回の衣装は、ウェディングドレスだった。真っ白なウェディングドレス。男装を紐解けば、現れたのは可憐な美少女だった。綾乃以上に、まだ完成された美ではないが、それだからこそ、未完成という魅力もまた存在していた。

「和麻は俺の男だ！」

小雷は吠えた。

「小雷ちゃん、言葉遣い」

「こつ、こつほん。和麻は私の男だ」

由香里に訂正されて、言葉を直す。まだ癖が抜けきっていない様子だ。

「そして、赤コーナーより登場するのは、神風綾乃選手！ 炎を司る炎術師の家系、神風家の姫君にして、法具炎雷覇の使い手。そして、中々想い人の和麻さんに、その想いを伝える事のできない、正統派ツンデレヒロイン！ いつになったら、二人のハートはくつつくの？ そして、二人にハッピーエンドはくるのか！？」

「……好き放題言ってくれるわねあんた」

綾乃は怒りに戦きながら、入場してきた。綾乃もまたウェディングドレス。いつも以上に似合っている恰好であったが、ドタドタと蟹

股で歩いてくる姿は、可憐とはい難い。由香里の実況にイラついているのだろっ。

そして、小雷と綾乃、二人は睨みあう恰好となる。

「ふん。身の程を弁えろ。火を吐く年増」

当然のように、小雷。

「ぴくっ……ふふ。言ってくれるじゃないの。花嫁云々はともかくとして、あんたに和麻を連れてかれるわけにはいかないの。だから、この勝負絶対に負けられないわ」

怒りを抑えながら綾乃。

二人の視線はまるで火花が散っているかのようだ。

虎と龍、風と炎。大局的な二人の一戦だった。

「それでは！ 一回戦の種目を発表します！」

張り紙で隠してあるボード版があった。三つに分けられている一枚目、一回戦と書いてあるその張り紙が、七瀬の手により剥がされる。

「一回戦の種目は料理！ 花嫁ともなれば、料理のひとつやふたつできなければならない！ 仕事帰りのダーリンの疲れを癒すのは、何を差し置いても、妻の手料理なのです！」

料理ができなければ、花嫁の資格なしといっても過言ではありません！ 制限時間は30分！ ちなみに、完成した料理は、ゲストの皆さんも食べる事になります」

会場となっている神風家の庭園に用意されているのは、可動式のキッチン。と、無数の食材。この中から好きに選んで料理をすればいいという事だ。

「では、第一試合スタートです！」

二人は、由香里の声を合図に、料理に取り組み始めた。

「なあ、宗主。綾乃って料理した事あんのか？」

設けられた主賓席に、致し方なく座った和麻は、横にいる重悟に聞いた。

「ない」

「は？」

「料理もなにも、全て従者がやる事になっている。あいつはそんな事に手を煩わせる位なら、剣技のひとつでも習わせた方が良かれと思つて育てた。だが、ここに来て、それが裏目に出るとは」

思わず、冷や汗が浮かんでしまふ和麻だった。

（よくわかんないけど　とりあえずは　）

綾乃は調理に入った。不器用な手で、包丁を握る。いつも握る刃物は炎雷覇だけだ。それにしただって、微細なコントロールなど必要としない。ただ、全力で斬るだけだ。

（切ればいいのよね！）

ズバツ！

普通は、トントンとか、可愛い音がまな板の上では響くものではないか。

肉塊。野菜。それが、一刀の元に分断されていく。

（それで、次は焼くんだらうけど）

ガスコンロがある。弱火中火強火。捻り口には三つの目安が書いてあった。

綾乃にとってはよくわからない事だった。綾乃にとっては、炎の制御というものは大の苦手だった。そうであるが故に、違いが、よくわからない。弱火と中火と強火。どの程度の違いがあるのか？　綾乃にとっては、数千度、数万度を超えるような炎とは、常に共にあった。炎雷覇は、小型の太陽ほどのエネルギーを備えている。

だから、その微細な違いになど、綾乃にとってはないにも等しい。

（要は、焼けばいいのよね）

綾乃は、慣れ親しんだ炎の精霊に従う事にした。

（わからん……これが包丁というものか）

対する小雷も似たり寄ったりだった。普段手にするのは、虚空閃だけだ。父も母も、自分に槍術を覚えてくれただけだ。料理やら家事

やらは、そういうものを担当する人間がやる、それが小雷にとっての認識だった。自分の責務とは、槍術を極め、鳳家に恥ない跡継ぎとなる事。

小雷は、包丁で切るなどという事を諦めた。

自分は、常にもっと切れ味の良いものと、共にある。

見れば、神風の巫女も、苦戦しているようだ。焦る必要はなかった。要は、自分が慣れ親しんだスタイルというものが一番良いのだ。

小雷もまた、風の精霊を呼び出す。

「ええ……両者、なにやら苦戦している模様」

と、由香里。

「片方は、異様な程の熱気を放ち、片方は暴風を放っている。ただ天災だな」

と、七瀬。

「はは……大丈夫なんでしょうか？」

苦笑を浮かべて煉。苦笑するしかない状況だった。

しばらくして、30分が終了した。

主賓の和麻、それからゲストのもとへ、二人の作った料理が運ばれる。皆が皆、顔面蒼白だ。今まで、多くの敵と出会い、命の危機にも遭遇してきた面々だが、ここまで顔を蒼白させた事はなかった。なかつたはずだ。

ただ、一人だけ例外はいた。

「こ、これが、神風先輩の手料理」

太一郎である。

例え、自分の為に作ってくれたわけではないとしても。憧れの、夢にまでみた先輩の手料理である。

目の前のグロテスクな物体も、愛のフィルターにかかれば、どんな高級料理にも勝る、至高の一品になる。

「それでは、ゲストの皆さま、試食をお願いします」

由香里は言った。

しかし、ゲストの動きは鈍かった。太一郎を除いてだが。

「いただきます！ うぐっ」

太一郎は、スプーンでそれを食した。それ、としか言えなかった。

何であるかは、それはわからない。ただの、炭化した物体。炭というのが相応しいのかもしれない。

「はは、お花畑が……がぐっ」

太一郎は、そのまま倒れた。

「柊君！」

綾乃が心配そうに駆け寄る。

「……はは、先輩、おいしかったです。おいしすぎて、お花畑が見えてしまいました。ですが、もう限界です。がぐっ」

太一郎は、目を閉じた。綾乃に抱き抱えられたまま。

「柊くー……ん！」

綾乃の悲痛な叫びが響く。

皆が、目で語っている。さっさと、なかった事にして次にいこうと。

「一回戦の結果は、引き分けです。いやー、熱い試合でしたね」

「同レベルという意味ではな」

由香里と、七瀬の実況、及び解説だった。

「さて、第二ラウンドです！」

「二回戦ともいうな」

と、由香里と七瀬。

「二回戦の種目は、こちら！」

由香里の声と共に、七瀬が張り紙を切り剥がす。そこには、『演技』と書いてあった。

「二回戦の種目は、幸せな新婚生活！ お二人には、幸せな新婚生活を思い描き、演技をして貰います！ 仕事帰りのダーリンを癒す

のは、ハニーの明るい笑顔。フリフリのエプロン。甘い仕草で和麻さんをメロメロにしろ！」

「各選手、どうやら着替えている模様」

と、七瀬。

綾乃と小雷の両名は、ウェディングドレスから着替えに向かっていくようだ。

「和麻さん、ゲストの皆さん、しばしお待ちください」

しばらくして、準備が終わったようだ。和麻は、玄関の前で佇んでいる。

悪寒がする。

風の精霊が教えている。この扉は、決して開けてはならない扉であるという事を。肩の震えは、どんな強敵と闘った時よりも強く、抑えきれそうにない。

しかし、ここまできて、引き返すわけにもいかないだろう。和麻は大きく息を吸い込み、戸をあけた。

「和麻！ ご飯にする？ お風呂にする？ それとも、あ・や・の？」

ガシャ！

和麻は勢いよく戸を閉めた。

見てはいけないものを見てしまった気がする。

自分の目に間違いがなければ、そこには、フリフリエプロンを着た綾乃がいた。流石に、裸エプロンという事はなかっただろうが、随分とラフな格好をしていた。ショートパンツとか、そこら辺を着ていたのだろう。そして、綾乃は、両手を腰に回し、猫がじゃれてくるような恰好で、先ほどの台詞を発したのだ。随分と似つかわしくない甘い声で。

ここは地獄か？ 地獄でなければなんなのか。和麻の脳内に、一瞬パニックが起こった。

次の瞬間、戸が爆ぜる。和麻は、それを何とか回避した。

「人がここまでしてるつてのに！ 戸しめる！ 戸！ 少しは、何かしらの反応しなさいよ！」

綾乃はいかれ狂っていた。飛ばされた戸は、融解していた。

「いや、あまりに不気味な光景だったもんだからつい」

「不気味って何よ。不気味って。そりゃ、あたしにして欲しいなんて思わないけど、あたしだって女の子なんだし。ちよつとやさつとほめられたいって気持ちも 何でもないわよ！」

綾乃は頬を紅潮し、頭を振った。

「……くそ。なんてうらやましいんだ。先輩」

あんな台詞、先輩に言われてみたい、そう思っているであろう太一郎だった。ちなみに先ほど復活した様子。

小雷に対しても、和麻は大して興味を示さなかったようだ。和麻からしてみれば、二人とも、興味を示すだけの年齢に達していないという事だろう。

「さて、二回戦の結果はドロー！ というわけで、三回戦の種目を発表します！」

「そもそも、二人とも和麻さんから興味を持たれてないんじゃないか？」

実況の由香里と七瀬だった。七瀬の指摘は的をえている気はする。

七瀬は、三枚目の張り紙を引きはがす。そこには、『決闘』と書いてあった。

「最強の風術師である和麻さんの花嫁となるのに必要なのはまず！

強い事！ 力はより強い力を呼ぶ！ 和麻さんの花嫁ともなれば、常に身の危険が襲ってきます。その時、弱いだけの守られる花嫁はNG！ そう、より強く、共に闘い歩んでいく存在が、和麻さんには必要なのです！」

由香里はそう宣言した。綾乃と小雷の二人もまた、動きやすい服装、いつも来ている服に戻っている。そして、その手には、愛刀、愛槍。「ちなみに、緊急事態の場合は、空いている炎術師、風術師の方は、

精霊の制御などをお願いします」

要は、空いている重悟、敵馬、煉で、綾乃のセーブを、和麻は小雷のセーブを行い、周りへの被害を最小限にしろという事らしい。

確かに、宝具持ち二人の闘い、しかも、相当の使い手同士の闘いだ。周りへの被害というものも馬鹿にはならない。ここら辺一体が焦土と化す危険性もある。

「それでは、両者、スタート！」

綾乃は炎雷覇を構える。小雷も虚空閃を構えた。

「ふん。最初からこうすればよかった。神風綾乃。俺は貴様を倒し、和麻を手に入れる」

「悪いけど、あたしだってあんたの思う通りにさせるわけにはいかないのよ。和麻に今、どこかへ行かれちゃこっちだって困るの」

「本当にそれだけか？」

「……どういう意味？」

「貴様の和麻に対する想いはそれだけか、という意味だ」

とどのつまり、和麻が好きなのかどうかだろう。年齢16、学園では多くの男子生徒から告白を受けてきた綾乃であるが、和麻に対する気持ちというものがいまいち整理できずにいた。そもそも、好きとはどのような感情かもわからない。ただ、和麻は放っておけない。なんだか、とがった刃物が出歩いているような感じだ。常に、危険なオーラを放っている。

それは、もしかしたら、助けられなかったという、昔の恋人の事があるのかもしれない。

過去にしばらく、未来を見て欲しい、そういった気持ちがある。（なんだ、結局は　　）

好きという事になるのだろう。しかし、それを認める事はできなかった。昔の恋人なんて忘れて、あたしを見て、なんて事、言えるわけもなかった。和麻の負った傷というのは、そんな簡単に忘れる事なんてできないものなのだろう。

「あたしも、よくわかんない。だけど、今あたしは和麻と離れ

たくないだけでは思う。一緒にいたいとは思う。それだけは、確実に言える」

今以上の関係にしたいとか、そんな欲張った感情はない。今のままでもいい。いつか、その傷が癒える時がきたのなら、その時にでも「……そうか」

小雷は笑んだ。そして、虚空閃を構える。それが合図だった。

最初の接触によって起こったのは熱風だった。風と炎のぶつかり合い。それによって起こった化学反応は、強い熱の風。和麻を筆頭に、皆のものはそれをコントロールして抑える。

術者でも何でもない、由香里と七瀬は、その風をまともに受けたら耐えられないだろう。

（ 炎雷覇と虚空閃、神器としての格に違いはない。次は術者の差だ。綾乃も力をつけているとはいえ荒削りだ。小雷も、以前のように感情的に矛をふるう事がなくなったからか、実力は肉薄している。って言う事は最後に物を言うのは ）

和麻は内心で、そう分析していた。

剣と矛の交わり。

風と炎の交わり。

その交わりはいくつも続いていくが、押されているのは小雷だった。事、直接対決において、風術は最弱とされている。対する炎術は最強だ。同じくらいのレベルの風術師と炎術師というものが闘ったら、普通は炎術師が勝つ。

風術師が勝とうと思ったら、不意をつくしかない。相手が技を発動する前、油断している時に。和麻と巖馬が闘った時のように。

それができない以上、小雷の劣勢は決まっていたようなものだった。正々堂々と闘う。その時点で小雷の負けは決まっていたようなものだ。

「……はあ、はあ」

小雷は、槍をつつかえにして、立っているのがやっとだった。体力の消耗が激しい。

「どう、まだやる？」

対する綾乃には、まだまだ余裕というものがうかがえた。

「……まだまだだ」

小雷は強気に言つてのけた。ただ、このまま続けても結果が見えて
いる。不意打ちでもできればいいのだが、小雷のプライドがそれを
許さないだろう。

綾乃は炎雷覇を振り上げた。殺すつもりはないが、怪我位は覚悟し
て貰わなければならない。一応、勝負は勝負であり、手を抜くわけ
にはいかなかった。

「そこまでにしてもらおうか。神器が壊れでもしたら困る」

全く別の方向から、声が響く。遙か上方からだった。思いもしまな
かつた声であつたが故に、綾乃の拳動はピタリと止まる。

「……ヴェルンハルト」

和麻が最初に、その人影に気付いた。マントにマスクをつけたこの
男。何やら得体が知れなかった。それから、横にいる少女。

どういった原理だろうか、風術師でもないのに、二人とも宙に浮い
ている。四精霊が司る精霊魔術ではなく、純粹な魔術を要したもの
なのだろう。

「だれ？ あの変態チックな人」

と、能天気によ香里。

「さあな。ただ、普通じゃないのは明らかだな」

と、冷静にいったのは七瀬だった。

「てめえ、なにしにきやつた？」

和麻は怒気を露わにする。敵の本拠地に、身ひとつで来るとは随分
と舐められた真似をしやがる。和麻のはらわたは煮えたぎりそうだ
つた。

「今、我々は、土の神器と水の神器を所有している」

ヴェルンハルトはそう言い放った。ガイアとクリスが持っていたも
のだ。二人が死んだ後、見つからなかったのは、そういうわけだっ
たのか。

「後は、君達の、炎と風の神器だけというわけだ」

「へえ、そいつを奪いにきたってわけか？」

だとしたら、随分と舐められた真似をされた事になる。ここにいる術者達は、和麻を含めて手練ればかりだ。いくらヴェルンハルトとラピスとはいえ、二人だけで相手にするのは手に余るはず。それとも、何かこちらを無力化する策を持ってきたのだろうか。ガイアやクリスのように。精霊喰いでも使って。

「いや、そういうわけでもない。いくら私でもこの状況が不利である事くらい理解はしているよ。要があるのは、私ではなく、ラピスのようだ」

ヴェルンハルトはラピスを促す。

緑色の目をした少女。かつて、和麻の恋人であり、全てであった少女。そして、和麻はその全てを奪われた。その少女の、残留思念をかき集めて作られたのが、ラピス。彼女を翠鈴の人形とするのか、翠鈴そのものと取るのか、その判断は難しくもあった。

「和麻」

ラピスは呼んだ。翠鈴と全く同じ声、同じ形で。

「やめろ……その声で俺を呼ぶな。その姿で俺を見るな」

和麻は呟く。風の精霊のざわつきが、和麻の深層心理を表しているかのようだった。

「あなたはもう、私の事を忘れたの？」

ラピスは言葉を紡ぐ。

和麻は動揺した。まだ、過去と完全に決別できているわけでもないのだ。

「なんて、私に心があれば、言っのかもしれない」

ラピスは続けた。この少女は、翠鈴であって、翠鈴ではない。心を持っているかどうかも定かではないのだ。

「私にとって、それはどちらでもいい事なのかもしれません。ただ、私は焼き餅を焼くという感情を持ってみたかった。そんなもの、心を持っていなければ出来ない事でしょう？」

「戯言は終わりか？ 人形」

風の精霊はもはや凶器と言っていていい位、荒れ狂っていた。由香里と七瀬は「きゃ」とか、可愛らしく声をあげながら、スカートを必死に抑える。

和麻は、鎌鼬を放つ。風術による原始的な攻撃手段だ。

『和麻、あなたは私を守ってくれる？』

しかし、翠鈴が言った言葉が思い出される。思わず、その鎌鼬を制御し、霧散させてしまった。

「……ふふ。優しいんですね」

ラピスは微笑む。翠鈴そのものの笑みで。

「余興はこれ位だ。また、私達は君達の前に現れる。その時は、本格的な取引といこうじゃないか。風の神器、炎の神器、水の神器、土の神器。四大神器をかけた闘いをな」

「……てめえの目的は何だ？」

ヴェルンハルトに対して、和麻は聞いた。

「魔術師の目的なんてひとつさ。真実の探求、それを魔術によって成す。故に魔術師は魔術師なのだから」

微笑すら浮かべながら、ヴェルンハルトは言った。

「また翠鈴の時みたいに、馬鹿な儀式を行う気か？」

「崇高な行いとは、俗人には愚劣にしか見えない事はよくある事だよ。それでは、これ以上の会話は無駄だ。後をつけるのは無駄だよ。風術師でも追跡できないように、工夫に工夫を重ねている」

ヴェルンハルトはマントを翻す。

「ばいばい。和麻」

ラピスは笑顔で手を振った。和麻は舌打ちをする。

他の人物は、ポカンとしたばかりだった。

「えーっと、では、今日の試合の勝者は」

その場の空気を読まず、言ったのは由香里。そんなもの、勝者なんているはずもなかった。

エピソード。

結局、和麻はまだ翠鈴の事を忘れきれずにいるのだ。綾乃はその事を、先日の事で再認識した。当面の敵は、小雷でも何でもなく、和麻にとつての過去そのものなのだろう。

そんなもの、闘いようはなかった。

（つて、まるでそれじゃあたしが和麻の事を　　）

綾乃は、胸中でそう呟く。手をぶんぶんと振り回す。子供みたいに。「どうした綾乃。そんなに怒って」

そして、和麻と出くわした。その顔を見るだけで、何だか赤い顔がさらに赤くなってくる。

「何でもないわよ。何でも」

「そうだな。お前は何でもない時でもいつも怒ってるからな」
（怒りたくて怒ってるわけじゃないわよ）

綾乃は胸中で呟いた。

「それで、どうするの？」

「何をだ？」

「あの魔術師と、ラピスっていう　　」

「見つけ出してぶっ潰す」

単純明快な答えだった。ただ、綾乃の聞きたいのはそこではなかった。ぶっ潰して、その後、和麻がどうしたいかという事だ。それをした後、和麻は、帰ってくる場所があるのか。

元々は、神風の出だ。元の鞘に戻る気があるのか。戻るとしても対外的な理由が必要だろう。一度破門された身だ。それなりの理由が必要になってくる。

（それなりの理由つて　結婚？）

神風家は、分家も居れば、女性は相当いるが（大神操などもそうだ）直系ともなつて年頃の女となると、綾乃位しかない。

もしかしたら、そんな未来もあるのか。和麻が元の鞘に収まる為に自分と結婚　　。

その想像をしかけて、ブンブンと首を振る綾乃。そんなのない、絶対はない、と。

「その後は、どうするの？」

「あ？」

「ぶっ潰した、その後は？」

「さあな。考えてもみなかったな。俺の人生は、翠鈴を殺された時に新しく始まったようなもんだ。今やっている事だって、結局は復讐の続きなのかもしれない。それが終わったら、そうだな」

和麻は呟いた。また新しい人生が始まるのかもしれない。翠鈴が全てだった時の自分のように、また、誰かの為に生きる事もあるのかもしれない。

もし、その誰かが、自分だったら良いなどと思ってしまった綾乃は、何だか恥ずかしくなってしまうた。

「ただ、全ては生きて勝たなきゃならない。今度の闘いは　そう勝つだけじゃない。生きて返らなければならない」

和麻はそういった。

復讐だけに生きてきた和麻が、生きる目的というものを見出しているのだ。生きて返ってくる、それは、未来に希望を紡いでいるという事。生きようとしているという事だ。

「和麻」

「なんだ？」

「今度の闘い絶対に勝つわよ。生きてね」

「当たり前だ」

綾乃は思う。この胸の奥にある気持ち、本当かどうかはまだわからない。

ただ、和麻のキモチだけは、何と無くわかったような気がする。だから、綾乃にとっては、多分、それだけで十分だったのだ。

FIN

和麻のキモチは??【完結】（後書き）

予定よりも短くなりました。

理由としては、長編にしようとした場合、色々と敵なり何なりを自分で作っていかねばならないからです。

僕が作ったキャラクターなんていうものが、亡くなられた山門先生に及ぶはずもないので、身の程を弁えて、長編とも短編とも取れないくらいの、中編くらいのボリュームになりました。

色々と至らないところがありましたが、楽しんで頂けたなら幸いです。

そして、亡くなられた山門先生、風の聖痕という作品について。

大好きでした。完結ができなかったのは残念でしたが、山門先生が残されたキャラクター達はとても魅力的で書いていて楽しかったです。

稚作だとは理解していますが、天国にいる山門先生に届いたらいいと、勝手に自己満足してこの二次創作を終えようと思います。

もう、二度と書くことはないかな、ステイグマは。

まあ。

ではまた、会う時までお元気で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5256p/>

和麻のキモチは？

2011年7月27日12時33分発行